

巻頭言

「舟を編む、言葉を紡ぐ」

理事長 新谷友良

Netflixで三浦しをん原作の映画「舟を編む」を見ました。

2時間以上の長尺の映画でしたが、時間が短く感じられました。15年間という歳月をかけて、5回の校正を繰り返して編まれた「大渡海（だいとかい）」という辞書の舟が、24万の見出し語を載せて時間と空間に広がる言葉の海を渡っていく光景を想像します。

「連れ連れに文学を語る」という対談集で、古井由吉が「言葉とは、どうも一身を超えた存続の念が含まれている。言葉とは、どうも一個の人間、一身を超えるみたいなんですね。そうじゃないと、言葉は働かなくなるんじゃないかな」と語っています。

言葉は、私たち自身が感じて、考えて、書いたり話したりしているように見えても、それは言葉という大海の数滴を偶々選び取っただけなのかもしれません。

私たちが選び取って書いたり話したりしたそのような言葉は、時が過ぎればまた言葉の大海に戻っていくように感じられます。

2年以上のコロナ感染の中で、私たちは思いもよらない形で言葉の大海から切り離されて、言葉を自分ひとりで選び取らざるを得なくなりました。そして、オンラインという便利なものが、自分の力で言葉を作り、その言葉で多くの人と交流するバーチャルな空間を増殖させて、言葉の大海を意識するようなことが少なくなりました。

以前巻頭言で触れたがんで闘病していた友人が、亡くなる数日前に送ってくれた手紙は、万年筆で書かれていました。ほとんどのやり取りがメールになり、手書きするのは年賀状ぐらいになった私たちの暮らしの中で、末期がんで苦しむ彼が万年筆を使って手紙を書いた気持が、今は少しわかるような気がします。

それを真似て、文章を手書きすることを少しずつ始めています。字が汚いことは生来のことで今更改めることは無理ですが、漢字の書き誤りが頻発することには、我ながら悲しくなります。パソコンで変換して、出てきた漢字を繋ぎ合わせて文章を作ることと、「言葉を紡ぐ」こととは違う営みのようです。

単語を選び、文章を綴る、漢字が必要なところは正しく漢字を使う。雑にしてしまった人との交わりを、自分なりに整理しようと、この秋から親しい友人に手書きのがきを出すつもりでいます。